

ラグビーワールドカップで見つけた 新しいスポーツビジネスの可能性

西村達衛（特定非営利活動法人神戸アスリートタウンクラブ 理事・株式会社プライズ）



ラグビーは文化性の高い競技だった

もともと私は、イベント企画マンとして多くのサッカーイベントに携わってきた。Jリーグ誕生期には全国巡回のサッカースクールを運営したり、セレッソ大阪のホームゲームの演出業務にも長年関わらせていただいた。2002FIFAワールドカップTMの際にも大阪・神戸開催の各種プロモーション業務を担当させていただいた。

年を経て今回のラグビーワールドカップ2019にも関わることができ、少し期間はあいたが、ふたつの国際スポーツイベントの自国開催の仕事をする事ができた。

今回の大会では、ラグビー憲章という教えを持つラグビーというスポーツが、サッカーなどの他競技とは違って、『文化』を感じさせる側面が多くあった。

選手もファンも、相手チームや相手国を理解し、リスペクトしようとする姿勢はコアファンだけでなく、にわかファンの心にも残ったのではないかと思う。

インクルーシブな社会を目指す今の時代に、ラグビーは実はよく合ったスポーツなのかもしれない。

日本サッカー界も、サッカーという競技が本来持つ精神に一度立ち戻って、サッカーの価値を見直す機会にしてもいいのではと感じたくらいだ。

そんな中、初のアジア開催であったラグビーワールドカップ2019大会は、チケット販売数やファンゾーンの集客数など記録づくめの大会と言われ、大きな成功を収めたのだが、同時に新しいスポーツビジネスがいくつかテストされ、大きな可能性を感じさせるものがいくつかあった。

FIVES という全く新しい融合型カジュアルラグビー ～スポーツ体験+音楽+スポーツ鑑賞+・・・できればお酒！～

今回のラグビーワールドカップでは、FIVES（ファイブス）という5人制のタグラグビーがファンゾーンのラグビー体験コンテンツとして話題になった。

5年かけて開発された、ラグビー体験&普及のためのコンテンツで、WR（ワールドラグビー：サッカーのFIFAにあたる世界組織）にも2019大会の普及コンテンツとして認証されたコンテンツである。

このFIVESは、4つの自治体の5箇所のファンゾーンで採用された。

FIVESはフットサルサイズのスペースでプレイするタックルなどの危険性のないタグラグビーだ。これに音楽と見て楽しむラグビーのエキシビジョンプレイを追加したもの。簡単に言えば、バスケットボールの3×3のラグビー版だ。

ラグビーワールドカップのファンゾーンでは、さらにビールと軽食がプラスされたことで、想像以上の大きな盛り上がりを見せた。

乗りのいいハウス系の音楽が流れる中、地元トップリーガーやアイドル女性タレントが繰り広げるFIVESのデモンストレーションタイムは、さながらクラブ（ディスコ）のように盛り上がった会場もあったくらいだ。

『お酒はあかんやろ！』

という意見もあるだろうが、どうやら『スポーツ+音楽+お酒』という組み合わせは相性がよさそうだ。

ラグビーやバスケットボールに限らず、こういう組み合わせはいろいろなスポーツに応用できる。

フットサルはもうすでにカジュアルスポーツとして定着しているが、卓球やバドミントン、新しいテニスのパデルなどもその類のスポーツとして十分に可能性がある。

FIVESのような小さなエリアで実現できるスポーツコンテンツは、本来スポーツができない商業施設や都市のど真ん中に、スポーツを出前することができるのである。

スポーツと音楽とお酒、少し知恵を絞れば、サッカーやフットサルはもちろんすべてのスポーツに新しいビジネスの可能性が出てくるはずだ。

スポーツ接待

もうひとつの新しいスポーツビジネスの可能性は、『スポーツ接待』というコンテンツだ。

欧州では、スポーツホスピタリティと呼ばれるものだが、今回のラグビーワールドカップではこのスポーツ接待が大きな可能性を示した。

STHというイギリスの会社とJTBが組んで設立したSTHの日本法人では、5万枚のチケット販売目標を大きく上回る7万枚のチケットを販売した。

価格は1枚7万円～200万円なのである。

スポーツツーリズムの中にも含まれるスポーツホスピタリティだが、スポーツを観戦しながらビジネス相手との商談や社員同士や仲間とのコミュニケーションを良好にしようというコンテンツだ。

まずスタジアム近くの会場で軽い食事とお酒を楽しみ、そのあと一緒に観戦する。

観戦後はまた会場に戻って、試合をつまみにお酒を楽しむのである。

今回のラグビーワールドカップではスポーツ接待が定着しているイギリスを中心としたヨーロッパの富裕層が中心客であったようだ。

国内のゴルフトーナメントや一部のプロ野球のスタジアムにも設置はされているが、東京五輪以降は、このスポーツ接待が一般にも定着しそうだ。

今全国で新しいコンセプトの野球・サッカーのスタジアムや1万人～2万人規模のアリーナが建設・計画されている。北海道の野球、長崎のサッカースタジアム、沖縄や大阪・千葉のバスケットボールのアリーナだ。

これらの新しい複合型のスタジアムやアリーナでは、サッカー、野球、バスケットボールを楽しみながらのスポーツ接待は間違いなく歓迎される。チームにとっては、より高い金額でチケットを販売できるからである。

STH ジャパンはすでにいろいろな国内プロスポーツチームと商談をしているという。

もちろんSTH ジャパンは東京オリンピックでもIOCと直接手を組み、スポーツ接待をさらに拡大する。

スポーツはJVでさらにその価値を拡大できる

このようにスポーツは、競技団体の中だけやスポーツ界の中だけという小さな世界の中だけでもなく、他のコンテンツや他の業種と手を組むことで、まだまだその魅力を多くの人に訴求し、ビジネスを拡大できる余地があるのである。

既成概念に捉われず、音楽、飲食、旅行・観光、ショッピングやレジャー、ITC業界と積極的に手を組むことで、その価値・可能性は大きく広がる。

スポーツの持つ集客力やエンゲージメント力は、まだまだこのビジネスを大きくできる可能性を秘めているのである。

日本のサッカー界も、身内の人脈だけでなく、幅広い業種の知恵を集めて、新しい価値を創造してさらなる発展をしたいものだ。

ラグビーワールドカップを経験して

杉崎 宏 (Le Coeur 代表)



世界のラグビーワールドカップ日本大会から！

初めまして！

Le Coeur 代表を務めます杉崎 宏と申します。初めに自己紹介をさせていただきます。

フランス料理を通して、世界中の様々な職種の方々とお客様や友人などとして交友関係を築いて参りました。

ラグビーワールドカップでは、欧州からお越しになれるお客様の日本滞在時のサポートを担いました。開幕まで各地にて学ぶ機会、交流する機会の中、サロン 2002 が 7 月 14 日に主催した月例会「ラグビーワールドカップ 2019 を語ろう」、8 月 23 日サロン 2002 緊急企画「伝説の 2015「日本 vs 南アフリカ戦」DVD 観戦 1 か月後に始まる！日本開催のラグビー W 杯に先立つ観戦ガイド」の 2 回、参加させていただきました。日本のスポーツ界の最前線にいらっしゃいます皆さまの中で寄稿させていただきますことは、誠に恐縮します。

海外側、特に欧州コミュニティが何故、ラグビーワールドカップを盛り上げていたのか、私の経験が今後のスポーツ界の発展に少しでも貢献できればと思い寄稿させていただきます。

28 年目の海外生活からみたラグビーワールドカップ

私は 1992 年、フランス料理人としてフランスへ渡航します。当時、ヨーロッパは 1989 年 11 月にベルリンの壁崩壊の影響により米ソの冷戦の時代を終え、混迷を期していました。当時、白人とその他の人種差別や人権に関して、今とは異なる時代でもありました。

まだ、南アフリカの人種隔離政策アパルトヘイトが残っていた時代です。

今回、ラグビーワールドカップにおいて、南アフリカが優勝しました。

昨年、南アフリカは決してチーム状態の良くありませんでした。今大会、南アフリカは大きな転機を迎えました。それはキャプテンにコリシ選手を黒人選手として初めて据えたことです。昨年、チーム状態が上がらない時期、コリシ選手に対して、迫害や脅迫めいたことが頻繁に起きていたことは、日本ではあまり知られていません。これはアパルトヘイトの名残がまだ残っている状態を指します。ラグビーワールドカップが開幕する直前、南アフリカではナイジェリアの人々に対して殺める事件があり、周辺の近隣の国々はサッカーの親善試合を中止しました。

それだけに南アフリカが優勝パレードをされたとき、黒人居住地でのパレードを初めて行ったことは、人種の垣根を超えた、大きな歴史的な快挙、変化と言えます。スポーツは勝てば官軍、負ければ、非難を浴びることが多々あります。今回、ラグビーワールドカップは、日本で開催されたことは非常に大きな役割を担っていました。ポット 2 である日本開催。アジア初の開催。大会前、どれだけの人々がラグビーワールドカップに関心を高めていたか不安がついていました。

なぜ、海外は日本に敬意を示したのか！

世界から日本はどのように写っているかご存知でしょうか。

日本は世界で平和な国のイメージがあります。

日本では、虐待や事件が連日のようにトップニュースとして扱われています。しかし、世界から見ると平和なイメージがあります。

例えば、時刻表があること。電車がほぼ正確に走ること。財布を落としても交番に届けられること。日本人ならば、それはよくある当たり前の光景ですが、彼らにとっては驚きの光景です。平和であることが、これほど心からリラックスできるものであると海外からのサポーター、ファンは大変喜んでいました。

今大会、オールブラックスが初戦、南アフリカ戦後、お辞儀ポーズの挨拶がありました。それに続くように各国がお辞儀ポーズをしました。これは文化を重んじる欧州コミュニティの相手に敬意を表す習慣と考えられます。ラグビー、サッカー共にフットボールとして同じルーツを持つスポーツですが、ラグビーは上流階級のスポーツ、サッカーは労働者階級のスポーツとして繁栄していたことはご存じでしょう。

ラグビーの精神に All for One, One For All, ノーサイドの精神があることは、今大会、大きくフォーカスされていました。

相手を敬う態度や行動が日本でも報道などでフォーカスされ、その光景を見られた方々は多くいらっしゃるかと思います。

歴史を超えた平和的な行動

今回、私は欧州の中でもアイルランドサポーターをサポートする機会が多くございました。

アイルランドは、ラグビー代表のみ、北アイルランドとアイルランドの合同チームであります。国歌斉唱は、アーセンと言われるラグビーアイルランド代表だけの曲を歌われています。この両国は、1960年代から1998年までアイルランド紛争と言われるプロテスタントとカトリックの宗教戦争が行われていたことはご存じかと思います。しかし、ラグビーアイルランド代表は、この困難な時代にも代表チームは分裂することはありませんでした。それは、欧州各国サポーターにとっても同じ意識を持ちます。

今大会、各国サポーターが国歌やアーセンを合唱している光景がスタジアム周辺でもありました。フランス人がアイルランドのアーセンを歌ったり、ウェールズ人がイングランド国歌を歌ったりしている光景は、

欧州が一体となる光景のように写りました。日本人が中国国歌と一緒に歌うことは無いかと思います。今回のラグビーワールドカップを通して、海外の方々と親交を深めた人々も多くいらっしゃる光景を拝見しました。海外の人々もホスピタリティに溢れる日本の人々と親交を深められたことをとても嬉しそうにしていました。

海外サポーターは SNS で連携していた！

今大会、彼らが連携していたものに SNS があります。これまでの大会で大きく変わったことにこの SNS があります。

Facebook では、各国サポーターが連携し、日本での滞在を楽しめるように半年以上前から準備していました。私は7月よりスカウトされ、来日サポーター40万人超、そのうち初来日が36万人と言われる彼らが日本滞在を不安にならない施策を日本在住欧州の人々と連携していました。長期休暇を活かして、欧州から車でシルクロードを通して、10ヶ月掛けて日本を目指したサポーターも多くいらっしゃいました。開幕戦の笛を英国から日本へ自転車で運んだ英国人男性のお話は有名ですが、4年に1度の祭典を本当に楽しんでいました。これは海外の休暇制度・ヴァカンスの考えが根づいている証でもあります。日本では連続休暇を数カ月休む文化は、まだ、ありません。一方、海外では、ヴァカンスの文化があり、彼らの行動パターンを理解していた部分は大きなアドバンテージになりました。

SNS を活用した海外サポーターとの交流方法！

大会前に問い合わせが多かったのは、スタジアム周辺の情報と日本の観光スポット。

大会直前は、虫よけの対処方法。中には、マラリヤに感染してしまったと勘違いしてパニックになられたサポーターやお客様もいらっしゃいました。

そして大会中は台風接近中のときの対処や移動手段のスムーズな方法。時には、迷子の捜索も経験しました。ラグビーワールドカップの場合、双方合意であればチケット交換（スワップ）が可能となります。私は大会中、交換会のことを知りましたが、大きなトラブルに発展せず安堵しましたが、一時600人が集まっ

たときには肝を冷やしました。

東京オリンピック、パラリンピックのとき、チケット問題など起きないことを願うばかりです。

ラグビーワールドカップを終えた現在の心境！

日本人は熱しやすく冷めやすい国民性があります。この熱気が次回大会まで、どのような変化が齎すのか楽しみでもあります。今大会をキッカケにラグビーの人气が凄まじいとお聞きします。今や全国のラグビースクールに入部者が殺到しているとお聞きします。大会前は、ラグビーは危険なスポーツとして、親御さんから懸念されていたとお聞きします。しかし、大会が盛り上がったことにより、ラグビーへの認識が高まったことは、非常に嬉しく思います。

1月12日から始まりましたトップリーグでは、日本代表以外に優勝した南アフリカ、ニュージーランド、オーストラリアなどからも代表選手が数多く新加入しました。開幕戦では、昨年の4倍の観客動員がありました試合もございました。プロ野球、サッカーに続く球技スポーツとして、日本でどのように発展していくか楽しみです。

ラグビーワールドカップから 東京 2020 オリンピック・パラリンピックへ

今年は、TOKYO 2020 オリンピック・パラリンピックが開催されます。2017年1月日本の企業様よりお招きいただき、「2020年東京パラリンピックにおける海外のパラリスト、障害者などの日本滞在時における食事はどのように対応すれば良いか！」を議論する場に招かれましたのが、日本のスポーツ界との関わりの始まりとなりました。その後、日本の政策の中でインバウンドビジネスが急成長することに伴い、観光産業との連携も図るようになりました。2002年日韓ワールドカップの時、訪日外国人旅行者は524万人でした。しかし、今や3000万人を超え、政府目標として来年2020年オリンピック開催年に4000万人を目指しています。(訪日外国人旅行者年度別推移 JNTO 参照)

私は、スポーツイベントがビジネスチャンスになると考え、2020年東京オリンピック、パラリンピックと観光を結びつけた形を2017年1月よりスタートさせました。そして、昨年行われましたラグビーワー

ルドカップは、大会前、多くの企業様がオリンピックを重視している様子は目に取れました。そのため、私が得意とします海外側のサポートを担うことにより発展が見込めると判断し、携わりました。

私が担いました内容は、欧州コミュニティが日本に大勢訪れる経験は、初めてに近い状況にあります。今回、欧米豪諸国から40万人が訪日されました。その彼らが日本滞在時に楽しめる手段をナビゲート、サポートする約目です。

ここで歴史を紐解きます。

ラグビーは、元々、欧州から北米、豪州、南アフリカなどへ移民が築いたスポーツと言われています。

ラグビーとサッカーは起源を遡りますとフットボールと同じ競技に当たります。それが労働者階級のフットボール、後にFootball associationのSoccerをピックアップし、Soccerになられた歴史はご存じかと思います。ラグビーは、上流階級のスポーツであることもご存じかと思います。

上流階級は、会社経営者や王族、貴族が多くいらっしゃいます。紳士淑女の振る舞いは、必然的に求められる欧州世界に於いて、自然とラグビーの世界に取り入れられたスポーツです。

大会期間中、海外選手が行っている事業を含めて、連日、ミーティングパーティー、レセプションパーティーが行われていました。

オリンピック、パラリンピック開催中は各国がホームタウンと併せて、様々なプロモーションを行われると存じます。日本の素晴らしさをぜひ発揮してほしいと思います！

今回、ホームタウンを築いたキッカケは、2002年日韓サッカーワールドカップにおいて、大分県中津江村の直前キャンプにカメルーンがフォーカスされたことにより、認知度が高まったこと。また、1998年長野冬季オリンピックのときに行いました長野県内ホームタウンをモチーフにし、今年の東京オリンピック、パラリンピックのホームタウンに繋げているとお聞きします。ぜひ、今年の東京オリンピック、パラリンピック開催前、各国とホームタウン地域との交流は、これから将来を担う子供たちへ貴重な機会となるかと存じます。

アイルランド・スコットランド戦 観戦記外伝

～ラグビーはサッカーの6倍のビールを飲む！～

茅野 英一（特定非営利活動法人サロン2002監事・帝京大学）



試合会場選びは自宅近くで

「4年に一度じゃない。一生に一度だ。」というこの日本大会の、その中でもワクワクする2試合を観戦した。これはそのうちのアイルランド・スコットランド戦観戦の外伝である。

その2試合は、プールAのアイルランド対スコットランド戦と準決勝のイングランド対ニュージーランド戦である。この2試合のチケットを購入した理由であるが、うっかりして第1回目の販売を見逃してしまったところから始まる。2回目の販売からチケット争奪戦に参加したのだが、この時点では既に決勝戦と日本戦は売り切れだった。私としては、この売り切れの意味であるが、宿泊観戦は避ける、チケット価格は数万円の範囲内というポリシーの下では売り切れだった。遠方やホスピタリティ付きであれば、まだあることはあったが、競技場としては、自宅から近い横浜国際総合競技場がやはり優先順位は高い。新横浜であれば、最悪歩いて帰れるし、タクシーで帰宅しても払える範囲だからである。私の頭の中には、「サッカーの試合の6倍のビールを飲む」、その言葉が渦巻いていたことは間違いない。そんな頭で購入できる試合を見てみると、先ず目についたのが、新横浜で行われる準決勝2試合である。準決勝1の対戦予想を調べてみるとラグビー・ジャーナリストの間の下馬評としては、イングランド対ニュージーランドとのことであった。事実上の決勝戦とみるジャーナリストも多かった。両方も好きなチームだし、生でハカを見てみたいということもあって、準決勝1を選んだ。決勝を買うつもりでいたのに買えなかったのだから、準決勝2も買うべきだったと思ったのは、ずっと後のことである。もう1試合は、プール戦から下馬評が高くて新横浜開催となると、先ず候補に上がったのが、アイルランド対スコットランド戦であった。この2試合で6万円ぐらいになった。この他にもう1試合ぐらい見たいと思いつつ、アクセスやら自分の仕事やらとすり合わせ

てみたが、なかなか難しかったので、この2試合となった。

アイルランド対スコットランド戦は、9月22日曜日16:45開始であるが、12時30分に新横浜駅の改札口で待ち合わせた。2時間ぐらいいは、会場の外の雰囲気味わって、2時間ぐらいいは会場の中の雰囲気を味わいたいという算段である。なにせラグビーの試合はサッカーの6倍のビールを飲むということなのだから。

アイルランドから来た老夫婦

菊名で横浜線のホームに降りると、シャムロック（三つ葉のクローバ、アイルランドのエンブレム）が付いたお揃いのグリーンシャツの高齢のご夫妻と目が合う。「アイルランドからか」などと話しかける。「アイルランドは強い、間違いなく優勝候補だ」などと「おもてなし」にこれ務める。実際のところ、2018年のシックス・ネイションズでは、2009年以来の優勝をするほか、その秋にはニュージーランドをノートライに抑えて16-9で勝っている。直前の9月7日のウェールズとのテストマッチも19-10で勝ち、この結果、初めて世界ランキング1位となっているので、決してリップサービスではない。結果として、この大会では、この試合でスコットランドを27-3と抑えたものの、日本に敗れた結果、プール戦を2位で通過した。準々決勝ではニュージーランドに当たるが、昨年のようにはいかず、14-46で敗れてベスト16で終わった。しかし、この時点では、間違いなく優勝候補であり、ご婦人の方は、アイルランドが優勝するのを固く信じているようで、「あなたはなぜスコットランドのシャツを着ているの」とたしなめる様な目で聞いてきた。私は大会前の夏休みにスコットランドを旅行したこともあり、プレグジットやスコットランド独立運動のことなどもあって、すっかりスコットランドびいきになっており、スコットランドで買って来たばかりのアザ

ミ（スコットランドの国花）の付いた紺のシャツを着ていた。「スコットランドを旅してきたばかりなので、スコットランドを応援したい」と言った。「日本人は判官びいきなのだ」とも言い始めたが、うまく伝わらなかった。ご婦人は興ざめたようで、会話が途切れたが、ご主人から質問がきた。「小机が最寄り駅だよ。食事をしてから会場に行くのだが。」とインターネットから打ち出したらしいアクセスマップを手にしながらか丁寧聞いてきた。「確かに近いのは小机だが、とても小さな駅で、食事をするには不便だ、次の新横浜で降りて食事をした方がいい。」とこちらも丁寧に返した。お二人とは、新横浜駅の改札口で別れた。

待ち合わせ時間よりだいぶ早く着いた。タータンのキルトを着た長身の男性、2メートルはあろうかという髭を蓄えた若いスコッツ（スコットランド人）もまた待ち合わせらしく改札の方を見ながら立っていた。「素敵なきルトだ。」などと話しかける。日本でいえば、羽織袴に当たるような正装だ。夏にグラスゴー大聖堂でみた花嫁に付き添う父親もこうしたキルトの正装だった。「アイルランドは強いね。」という「そのとおりだ。勝つのは難しいかもしれない。」と仕方なさそうに答えてきた。

試合前のビール

中塚先生、嶋崎先生ご夫妻と合流して、駅から出る。駅前のさほど大きくない広場では、テント村でラグビーや書道など日本文化を紹介していた。かなり人が増えてきた。どこかでビールを飲もうと探していると、レストランが、外でビールとつまみを売っているところを見つけた。この店も店内は予約客で満杯で、外に出したテーブルとイスも外国人客で満杯。みんなビールを飲んでいる。立ち飲みを強いられたが楽しんだ。座れるところへ行こうと2軒目を探す。中塚先生が2002年の時にも行った店があるからと向かう。私も何度か行ったことがある店だ。途中、コンビニの前はビールを飲んで談笑している外国人客で歩道が埋まっている。コンビニは店の外でビールを売りまくっている。しかし、コンビニのトイレは使えないとの表示。何か矛盾を感じるのは私だけか。横濱ハイボールという名称だったと記憶している店に着く。ここも店外でビールを販売しているが、中に席があったので、そこでまた飲み始める。店内は、日本人客は私たちだけだ。まるで英国のパブにでもいるような混雑と雰囲気である。当然だが、店のトイレは長蛇の列である。



横浜ハイボール前を占拠するアイルランド人



スコットランドも負けてはいない

2時間前になったので、緑一色のアイルランド応援客の大きな流れに乗って会場に入る。まるでセント・パトリックス・デーのようである。マッチディプログラムを買おうとして隣を見ると、大柄の外国客がたむろっている足元に1ダース以上の生ビールのカップ。話しかけるとアメリカの大学のラグビー部のOBでここでアジアにいるOBが集まるとのこと。「まあ呑め」と言われて我々もビールをご馳走になる。何杯でもど



スタジアムに入るとこのようにビールが置かれていて



アメリカのラグビー部OBたちに
ビールをおごってもらった



ビールの売り子ありがたい

うぞとのこと。なんと剛毅なこと。

席につくと、やっぱりビールを頼んだ。一人の売り子が売り出すと、次から次へと注文が来て歩き出せない。まだ試合まで1時間もあるのに、何杯のビールを飲んだことか。試合前、試合中、そして試合後とビールを飲むのが、ラグビーの楽しみ方とか。サッカーの6倍飲むというのも確かに思えてきた。

本当に6倍のビールを飲んだのか

FNNの記事「本当にラグビーファンは6倍のビールを飲んだのか」(フジテレビ報道スポーツ部坂本隆之)によれば、ワールドワイドパートナーのハイネケンは9月の売上げは対前年比340%とか、10月2日ニュージーランド対カナダ戦(大分)では、観客3万4,411人でビール約1万3,000リットル消費されたが、普通のサッカーの試合(大分トリニータ)は約1,400リットルで、観客が倍入っていることを考えてもラグビーが6倍近いとのことである。さらに「サッポロライオンが運営している新宿のアイリッシュパブでは、9月時点で最高で前週の5.5倍の販売量を出した。」とのことである。まさに6倍である。

試合が始まった。まさに緑の嵐のようであった。27:3というスコア以上にアイルランドは強かった。

試合終了後も、またビールを飲んだ。我々も6倍飲んだように思う。

紳士とは富裕層のこと!?

試合前にアメリカのラグビーファンにビールをご馳走になったが、イングランド・ニュージーランド戦でも、ご馳走になりそうになった。インランドのレプリカシャツを着て、ハーフタイムにビールを買うために並んでいると、後ろの同じくレプリカを着た紳士が、イングランドを応援してくれているなら、何でも好きなものを飲んでくれと1万円札を出してきた。丁重にお断りしたが、なかなかお札を引っ込めなかった。何を気にしているんだと断ったのが失礼だったのかと思った。ラグビーは紳士がプレイするフーリガンのスポーツ(Rugby is a hooligan's game played by gentlemen)と言われるが、この紳士の意味は、紳士たるもの金持ちでなければならないということなのを実感した。アエラに載った鶴岡公二・駐英国特命全権大使(<https://dot.asahi.com/aera/2019011000030.html?page=1>)の記事によれば、英国のパブリックスクールについて、「イギリスでは私立校にあたり、中世のラテン語文法学校を起源に、富裕な大地主「ジェントリ」を中心とする「ジェントルマン＝紳士」を養成する学校として発展した。その教育はいまなお受け継がれ、入学審査の厳しさと高額な学費で知られる」と述べている。紳士のスポーツとは、「富裕な大地主のスポーツ」なのである。管見にして今回の大会の訪日外国人の消費額はどのぐらいか知らない。しかし、サッカーの6倍では済まないのではないかと感じた。

「8枚」のレッドカードが持つ意味を考える

関 秀忠 (特定非営利活動法人サロン2002理事・弁護士)



急増したレッドカード

サッカーのゴールキーパーを長年たしなむ私が、ラグビーワールドカップ日本大会を見て強く感じたことの 하나가、審判が厳格なジャッジメントを通じて「頭部」を守ろうとする意識の高さであった。桜の戦士らをはじめ、各国のプレイヤーも、そのジャッジの厳格さを前提として、ダブルタックルなど、反則しないための方策を入念に準備していたように思われた。

「8枚」。これはラグビーワールドカップ日本大会で示された「一発退場」を表すレッドカードの枚数である。前大会の「1枚」と比較にならず、かつ、過去最多の枚数であった。

ワールドカップ前の「厳罰化」示唆

レッドカードの急増は、「頭部の保護対策」を念頭に置いた、ハイタックル基準の明確化と、これを厳格に運用する方針が徹底されていたことに起因する。8枚のレッドカードのうち、6枚もの枚数を占めた反則が、過去の8大会通算で僅か2枚しかなかった「頭部・顔へのハイタックルとショルダーチャージ」だったのである(小林深緑郎「急増したレッドカード」Number PLUS 2019.12・124頁)。

2019年5月、ワールドラグビーは、ラグビーワールドカップ日本大会に先立ち、危険なショルダーチャージ・ハイタックルの判断基準を明文化し、ボールを持っている選手の頭に直接触れた場合、タックルを受けた選手の頭が後ろに大きく振れた場合など、明確な判断基準を設けた。そして、ラグビーワールドカップ日本大会の直前期には、審判委員長が、「仮にレッドカードの乱発を招いたとしてもハイタックルには厳罰を科す」旨を明言していたのである。

頭部保護意識の浸透

2015年～2019年の5年間に脳震盪の後遺症で引退したトップラグビー選手は42名に上るとのことである([theblitzdefence] 2018年5月1日初出)。前述したルールの厳格化は、ラグビープレイヤーの脳震盪やその後遺症の発生を防ぐ対策が喫緊の課題となってきたことによる、業界全体の一連の動きの延長線上にある。

例えば、2017年11月21日にイギリスのスポーツ医学雑誌「British Journal of Sports Medicine」では、日本の順天堂大学大学院医学研究科整形外科・運動器医学の金子和夫教授、川崎隆之准教授、祖父江省吾医員らの研究グループが発表した「ラグビー競技においてタックルした選手の頭部位置が相手選手の進行方向を遮るように衝突した場合、脳振盪を含めた頭頸部の外傷発生頻度が約30倍高くなること」の研究結果が公開されていた。また、ワールドラグビーは、ハイタックルをした選手が、安全なタックルをした選手よりも4倍高い確率で頭部を負傷する可能性がある旨のデータを収集したようである(佐藤直子 2019.10.11「THE ANSWER」ウェブ記事)。ハイタックルやショルダーチャージは、受ける側は勿論のこと、タックルを試みた側にも大きな危険をもたらすことが実証されており、その結果、タックルを低くすべき旨がラグビー界全体のルールに落とし込まれたという経緯のようである。

このような研究成果を無駄にせず、「頭部保護」徹底を貫いていこうとする意識は、ラグビーというスポーツにおける「常識」に昇華しつつあるように感じられる。

例えば、先般のラグビーワールドカップ日本大会のオーストラリア対フィジー戦では、オーストラリアのR. ホッジがフィジーのヤトの頭にショルダータックルを浴びせ、脳震盪でヤトが負傷退場する結果となった

事態があった。この危険な「ハイタックル」を、レフェリーとTMO（テレビジョンマッチオフィシャル）は残念ながら見逃してしまったのだが、試合後、「危険なプレーであり確実にレッドカード相当」との批判が広く巻き起こり、試合後の規律裁定でレッドカード相当と判断されたホッジは、試合後に3試合の出場停止が決定されたのである。

ラグビー競技は他競技に比べ頭頸肩部外傷の多いスポーツであり、かつてはスクラムで脊髄損傷が多く発生していたものの、バイオメカニクス研究などをもとにルール改正が繰り返され、その発生数は大きく減少してきたと言われている。しかし、まだまだその道は過渡期にあり、これからも常に研究がなされ、より安全性を追求する取り組みがなされていくであろう。そして、医学的な調査・研究結果は、脳振盪の発生頻度が高いスポーツの指導者、コーチ、選手自身はもとより、学校関係者、スポーツメーカー、そしてスポーツ協会関係者ら、多くの人々に広く認識されていくべき内容であると考えられる。

サッカーにおける「頭部保護」の意識醸成のうねりを

それでは、ラグビーに比べて、サッカーにおける「頭部保護」への取り組みや意識の高まりについてはどのような状況であろうか。

2017年10月16日のニュースで、インドネシアのプロサッカークラブのゴールキーパー選手がゴール前の激しい激突により顔面・首を負傷し意識不明のまま死に至るといふ悲しい事件が起きた（同日・サッカーダイジェストWeb「インドネシアで悲劇が…試合中の衝突で38歳のゴールキーパーが帰らぬ人」）。

日本においても、脳をめぐる事故がないわけでは決していない。2019年のみでも、柏GK中村航輔選手や名古屋GKランゲラク選手が、いずれも右サイドからのセンタリングに飛び込んだところ、シュートのために走りこんできたFWや全速で戻りながらのDFと衝突する形で脳振盪を起こし、救急搬送された後長期の欠場を余儀なくされたという事態があった。2020年初頭の高校サッカー決勝など、GKがいつも隣り合わせで戦っているゴールポストという「凶器」に激突するシーン事象も枚挙に暇がない。また、昨年、元日本代表の那須選手は「数年前からヘディングをして脳が揺れる現象があり、それが今年は練習でヘディングをするたびにあった。ヘディングをするのをいやがる自

分がいた」と述べて引退していった。直近の2020年1月28日には、英国ガーディアンで「サッカーのヘディングで認知症に？関連性裏付ける解剖結果や統計が次々に」というニュースが配信されたばかりだ。

しかしながら、サッカーにおける頭部への打撃に関しては、脳振盪が起きた後にどうするかというガイドラインは存するものの、「脳振盪・頭部外傷にならないために、事前にどうしていくべきか」という意識はいまだに高まっていないのが実情である。GKはいつまでも裸の頭のまま戦うことが当たり前であり、世界の著名選手では唯一と思われる、ヘッドギアを装着していたペトル・チェフ選手は既に引退してしまっており、ヘッドギアやマウスガードの装着やその有用性についての議論が全く高まっていないのが実情である。

インドネシアの死亡事故となる悲劇を見てもなお、GKはいつまでも「裸」の頭のまま戦っているが、現状のままでは仕方がないと考えて済む話なのだろうか。それとも将来、GKは防具の装着が義務付けられ「カスタマイズされたマウスガード」や「カッコ良い新型ヘッドギア」を付けるのが当たり前の世の中になり、現在の状況が後世において、サッカーの歴史の中の「過渡期」であったということになるのだろうか。

コンタクトが多いスポーツにおいて、ルールは選手の安全を守るためにも存在するものである。医学的・社会的事実のエビデンスに基づき、ルールの策定・運用をもって、脳振盪・急性硬膜下血腫などの脳のダメージを可及的に回避しようという動きは、ラグビー界やプロスポーツ界のみならず、老若男女すべてのスポーツ・プレイヤーを守ることに繋がる必要な取り組みであると筆者は考える。新たなルールを作ること、そしてレフェリーが運用していくことに対しては、勝負の世界であることから様々な批判もあると思うが、サステナブルなスポーツ社会を築き上げるために、「今は過渡期」かもしれないという気持ちを持って、未来のために勇気のある正しい判断を下していくための研究とプロセスを積み重ねていくことを願う次第である。サロン2002のコミュニティにおいて、プレイヤーの「安全」のためのプロセスを歩んでいくために興味・関心を抱いている方々がいらっしゃれば、是非とも、様々なアイデア、気づき、感想を持ち寄り、専門家の皆さまと自由に意見交換する機会を作りたいと考えている。